

徒然なるままに…44

—全体授業研①…「子どもの思考」と「経験」からつくる授業—

平成28年7月1日
白鳥小学校 研修部

今日から、7月です。早いもので、新年度が始まって3か月が過ぎようとしています。この間、私の学級のある子どもが「最近、1週間が過ぎるのが早いと感じるんだよね。」と話しているのを聞きました。たくさんの行事が目白押しで、ある意味、追われていて、慌ただしく過ごしているからでしょうか。落ち着いて、じっくりと学びたいなあとつぶやいた今日この頃です。



さて、先日は、全体授業研第1回目として、1年の先生方が提案してくださいました。入学してまだ3か月、さらに、梅雨と暑さと、コンディションの悪い6月に授業公開された先生方は、まさに、チャレンジャーだと思いました。しかし、落ち着いた雰囲気、最後まで授業に臨んだ子どもたちの姿を見て、感心しました。「素直で静かな子どもたちに、心が洗われるようだ。」と教頭先生と有森先生がおっしゃっていました。

今回は、朝倉先生の講話を踏まえ、「思考」と「経験」を観点として、提案してくださいました授業づくりについて振り返ってみたいと思います。

1 子どもの思考を仕組むために

この授業は、みんなが公園を安全に、気持ちよく利用するためには、ルールやマナーが必要であるという、公園における公共性について考えることがねらいでした。そこで、ルールが書かれた看板を示して、「なぜ、公園には、『ルール』があるのだろうか。」と問い、施設に着目して、学校のグラウンドと公園を対比して、いろいろな人がいろいろな用途で使えるようにするためには、ルールやマナーが必要であることに気付く展開となっていました。しかし、子どもの認識として、多種の人が多様に利用することとルールやマナーの必要性がうまくつながらなかったように思います。この展開を、子どもの思考がつながるようにするために、二つの展開例を考えてみました。

一つ目は、まず、学校のグラウンドでは許されていて、公園では許されていないルールや施設などを取り上げ、「なぜ、〇〇は、公園では、許されていないのだろうか。」と問います。そして、公園は、グラウンド以上にいろいろな人が利用すること、だから、みんなが安全で楽しく利用するためには、グラウンドとは、していいこととよくないことが違ってくることに気付くようにする展開です。



二つ目は、まず、公園に捨てられたごみを示して、「なぜ、公園にごみを捨ててはいけないのだろうか。」と問います。そして、「みんなの公園だから。」などという発言から、「『みんな』とは、だれのことか。」

『みんな』が使う公園だから、どんな使い方をする必要はあるか。」などと、さらに問うて、利用する人だれにとっても、安全に気持ちよく利用できるようにすることが大切であることに気付くようにします。さらに、そのために公園にあるものの一つとして、ルールを提示するという展開です。

その他、子どもの「学び合い」と思考を仕組むための手立てとして、気付いたことの中から、3点を挙げておきたいと思います。

1点目は、子どもの発言の後の「いいです。」という呼応についてです。これには、「聞いています。」「受け入れています。」というメッセージを送り合うという意味や意図があるのだと思います。しかし、子どもが相互に学び合うためには、呼応ではなく、意見交流を展開する必要があるのではないのでしょうか。他の意見を聞いた上で、自分の考えと比較し、似ているのなら、言い換えたり、さらに続きを発言したりする、違いがあるのなら、違いを述べたり、反論したりすることによって、子どもの考えが練り上げられ、学びが深まるのだと思います。その上、このような意見交流の中で、一人一人の意見が生かされることになり、互いに認め合う集団づくりにつながると考えられます。

ルールが言われた看板→「楽しい公園に、なぜ、ルールがあるのか。」(一問一答)
→「そこぞ…」
学校のグラウンドにないのに公園にはある施設を見つける。(対比する)
→「多様な条件を持つ人たちが多様な用途で利用できるようにする必要がある」ということは…
利用者みんなが安全で快適に利用できるようにする必要
→「だから…」
ル ルやマナ |

2点目は、子どもの思考を促し、つなぐことです。

1点目で述べたような子ども相互の意見の練り上げには、教師の仕掛けと支援が必要です。ねらい

〔資料1：今回の授業の学習内容の論理的なつながり〕を明確にし、学習内容を論理的なつながりとしてとらえ、問いとそれを追究するための思考の仕方を設定するとともに、このつながりを基に、子どもが探究するストーリーを考えることが必要だと考えられます。今回の授業で言うと、〔資料1〕のような思考のつながりと学習展開が考えられるでしょう。

また、子どもがさらに思考し、認識を引き出す発問を組み立てておくことが必要でしょう。例えば、本時で「公園で遊んだとき、何が楽しかったか。」と問い、子どもは、楽しかった場所や施設のみを答えました。そこで、「どんなことをしたのか。」「どんなことが楽しかったか。」などとさらに問うことによって、子どもの経験やかかわりを引き出したり、「楽しくなかったり、うまくいかなかったりしたことはなかったか。」などと問うことによって、朝倉先生もおっしゃっていたように、ルールが必要になる場面を引き出したりすることができると考えられます。

3点目は、板書の工夫です。板書には、子どもの思考の流れを整理し、本時の子どもの思考と認識の跡を残す意義があると思います。したがって、どういう事実から問いが生まれ、それを探究するために必要な事実・内容がどうつながり、それを子どもは、どう考え、認識を高めていったかという、2点目で述べた学習内容の論理的なつながりと授業(子どもの探究)のストーリーから組み立てられる必要があるでしょう。前頁の〔資料2〕は、先日行った6学年社会科「武士の世の中へー『元寇』にあえいだ鎌倉幕府」における板書です。この授業は、「元寇」後、幕府が御家人にほうびを与えなかったわけを御家人・幕府両方の視点からとらえ、鎌倉幕府の動きについて考える展開でした。

そこで、幕府と御家人の主従関係に当てはめて考えることによって、問いを設定し、幕府・御家人双方から「元寇」後の動きをとらえ、さらに、この関係が崩れたことを見出す展開をまとめようとしています。拙いものですが、参考まで。

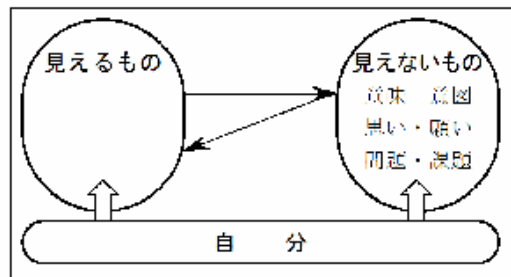


[資料2:「武士の世の中へ」(ふかめる2/2)板書]

2 経験から気づきへ、気づきから新たな経験へ

今回の朝倉先生の講話で、生活科授業の特性についてお話いただきました。それは、「経験」を媒介にした学習展開です。

子どもは、まず、具体的な活動によって、いろいろな経験をします。これを通して、ものとその様子や姿、動きなどといった、たくさんさんの「見えるもの」に気づきます。気持ちや疑問・問題などの「見えないもの」に気づくこともあるでしょう。そこで、「なぜ。」とか「どうすればいいか。」と問い、ものの



[資料3:生活科における内容の構造]

の意味、思い、問題などの「見えないもの」に気づくようにします。さらに、気付いた「見えないもの」を探し、自分もそれにかかわろうと、経験しようとするという展開を仕組むことが必要だということです。これを朝倉先生は、[資料3]のように図示されたのです。



先生方は、「リサとガスパール」という話をご存知ですか。これは、フランスの話で、「トフトモ」(永遠の友達)の二人の子ウサギが登場します。

この二人は、活動的で、身の回りのものや人といろいろなかかわりをします。どんどん盛り上がってくると、二人は、必ず失敗をしてしまいます。「あー、やっちゃった。」これがお決まりのせりふです。そこで、二人は、けんかをしたり、片方が一方的に責めたりすることもあるのですが、お互いにアイデアを出し合い、それを即実行し、修正を加えながら、見事に問題を回避していきます。「やったね。」これも決めせりふです。

この二人の姿に、生活科のヒントが隠れていると思います。それは、身の回りのものや人と、豊かにかかわる経験を展開していることです。これまでの経験から多くのことを知り(経験知)、次へのかかわりを展開したり(好奇心)、アイデアを出し合いながら、起こった問題を二人で乗り越えたりする(発想力・主体性)学びを展開していると思います。また、問題を乗り越えることを通して、「次からこうしよう。」と二人が話し合ったり、周りの人から助言をもらったりして、自分と周りとのつながりとかかわり方を考えることや、二人の「仲間」としてのつながりを深めることができていると思

ます。よかったら、絵本やアニメをご覧になってください。

私は、ついつい、アカデミックな内容に迫ろうとしすぎてしまうところがあって、学習が子ども（の経験）に近づきにくくなることがあります。経験から学びを生み出すことも、子どもの主体的な学習を展開するために必要なことなのだと思います。



今年度も、各学年で、「学び合い」のある社会科・生活科の授業づくりと新たな教材開発が進められていることと思います。全体授業研を、それらを互いに共有化し、よりよく吟味・検討していく、教師集団の「学び合い」の場としていきたいと思っています。もっと、気軽に考えられていることや悩んでいることを発言し合いながら、皆さんのお力で、新たな学びや示唆を与え合える会にしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。